

都山女大家政。高館作夫，関口富左，影山弥，真船均，須田秀幸

目的 さきに見たように，現代社会は故郷喪失の状況にあり，家の崩壊の危機に瀕している。この状況下において，家政学は何をなすべきか。その研究動向をみるとき技術（被服や調理などを理論の現実化であり，一つの技術によると解する）のもつ本来的意味を追求せず，もっぱら制作の成果と自然科学の立場からの観察と実験による研究（数量化，図表化）がおこなわれているように思う。そこで，今回，これらの立場そのものの考察をなし，技術のもつ意味と限界を追求し，現代社会における家政学のあり方に一つの示唆を与えたい。

方法 プラトン諸對話篇，アリストテレス「形而上学」「ニコマコス倫理学」などを中心テキストにする。

結果 経験は当推量や勘で行動するのに対し，技術は対象の本性或原因を究めて，それに従って行動する。したがって偶然による失敗は免れる。しかし，他方，技術は一般理論にもとづくためそのままでは実践されず，経験を合せ持たねばならない。技術は，人間に豊かさや便利さを与えるという意味で生存に必須のものであるが，それ自体，中立性，無記性の性格を有し，より高い善を追求するための手段でなければならない。したがって，その存在の意義と価値をもつために，より高い目的概念（Episteme）を絶えず求める必要がある。